

## 日本農業復興に提案

### 自然農の重要性を訴える

「自然に還れ、農業・環境の復興は日本の復興につながる」をテーマに日本の農業と環境シンポジウムが農業生産法人日本豊受自然農(株)の主催で3月20日午前10時から京都・京都市リサーチパーク サイエンスホールをメイン会場に札幌、東京、名古屋、福岡、沖縄の会場を同時中継で結んで開催された。その模様を紹介する。

最初に農業生産法人日本豊受自然農(株)の静岡県函南町と北海道洞爺で展開している自然農四季折々の取り組みがダイジェスト映像で紹介されたが、「農薬、化学肥料」を使わない農業に徹しているにも関わらず、収穫量も多い点の特徴。また、由井代表が函南の農場で富士山をバックにテンポ良く麦踏みする姿はコミカルで歓声もあがっていた。

講演者のトップバッターは「宇宙の法則からみた農業の理論と実践」というテーマで一般社団法人テネモス国際環境研究会でフリーエネルギー研究者でもある飯島秀行理事長が講演。「全てはたった一つの宇宙法則で動いている」と話しながら自然のサイクル、病害虫が教えてくれること、たった40分で残飯から発酵が進み堆肥ができる驚きの技術、農業実践などについて語り最後に「我々は残された時間で真剣に命を見出していかなければならない」と話した。

次にグリーンオーナー倶楽部を起し、全国で自然農を推進されている大下伸悦主宰から「耕作放棄地も人も劇的に蘇った。利他共生の農地再生運動」というテーマで講演。最初に自然治癒力を触発させる由井代表のホメオパシーの療法がこれから広がっていくことへの期待などを述べた後、耕作放棄地を再生させるために大下氏自身が利他の心で農を実践し、千葉県、京都府、愛媛県などでの実践例を紹介した。それも自然農で耕作放棄地を甦がえさせている点の特徴。

続いてNPO法人元氣農業開発機構の成瀬一夫常務理事兼幹事長から「自然農を推進することは日本復興につながる」というテーマで講演。農薬、化学肥料を使い続けることで、日本人の多くの人々が病気、難病にかかってしまうのではなかろうか、と危惧し、環境農業新聞を創刊したと語りながら、硝酸態窒素の恐ろしさ、虫がすぐ死なないので安全という農薬、ネオニコチノイドは脳をおかしくすると言われている等と解説。さらに地域活性化させていくために「儲かる農業」の実現させる必要があると述べ高収量を得られる「多段ポット栽培」などを紹介した。

午後に入ってカレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシーの菊田雄介講師が「人・動物・植物に自然治癒力を活かすホメオパシー」と題して講演。菊田氏は心も体も精神も三位一体で癒す自然治癒力を活かすホメオパシーについて分かりやすく説明した。

続いて農業生産法人日本豊受自然農(株)で静岡県函南の自然農園に従事する工藤暢彦さんと北海道洞爺で従事する米丸輝久さんは「自然農実践者の現場の声」をレポートした。多くの無農薬の野菜を作っている工藤さんからは落ち葉堆肥を作る様子が報告され微生物によるアクティブプラントという発酵液の中にホメオパシーのレメディイが入っていて、通常2年くらいかかる堆肥づくりをたった4か月で行っている。この落ち葉堆肥の中ではカブトムシの幼虫、ミミズも活発に働き、堆肥化に貢献している。

また、米丸さんは洞爺農園で栽培されている自然の氣に溢れたハーブを紹介した。生ハーブや乾燥ハーブティーを作り、全国10カ所の自然喫茶に搬入している。また、休憩時間に果樹を植える前に、土地のエネルギー状態を上げるため土に炭を埋め込んだ後植樹をしている風景や、日本豊受自然農の野菜を使った由井代表のクッキングや収穫の様子、農情で無農薬だからできる野菜の丸かじりの様子なども映され、会場からは歓声があがり、無農薬・無化学肥料の野菜がいかに安全・安心であり、おいしいかを実感した。

続いてフラワーエッセンス研究家でカレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー講師である東昭史さんが「地球からの贈り物・フラワーエッセンス」と題して講演した。東さんは「植物は自分自身を映し出す鏡であり、植物に目を向けることで自然に従い賢く生きることができる。そして、その懸け橋として植物のいのちを転写したフラワーエッセンスが存在するので、ぜひ活用して頂き、人間と環境の関わり、自分自身のあり方について考えて欲しい」と語った。

次に長野県の薬剤師会専務であるNPO法人自然科学研究所の小谷宗司理事長は「薬草の豊富な御嶽の自然を守る」と題して講演した。講演では、長野県の薬剤師会専務理事、また地域の農業振興などにも関わってきた実践や経験も踏まえ、総合的な視点から、現代の食糧事情、農業生産事情、耕作放棄地の問題などを本音で、様々な現場の事情まで含めてお話をされ、様々な問題提起を投げかけた講演となった。

J A 函南東部代表理事組合長を務める片野敏和氏は「自然農による酪農業の現状と今後の課題」をテーマに講演した。

片野組合長は「日本一小さい農協ですが」と前置きし「函南地域の耕作放棄地を、由井代表を中心とした日本豊受自然農の皆さんが農薬、化学肥料を使わない自然農で引き継いで農業を続けられることに感謝している」と述べ、自ら実践している農薬、化学肥料を使わない酪農を行

うことでの牛乳づくりの実践について語り、人間の健康を考え、自然農を行うことの重要性についても話した。

また東日本大震災、福島原発事故で大きな被害に遭われた福島県の酪農の件についても自ら何回も足を運ばれた経験などを含め語り、原発を再稼働させようとしている利権にしがみついた政治家などの愚かさについてもコメントされた。JA函南東部で行われている自然な酪農や、日本豊受自然農の由井代表の自然と共生する農業とその人柄に最大限のエールを送っていた。

続いて日本からの講演の最後となる由井代表は「日本農業復興への自然農からの提案と放射能問題への対策法」をテーマに発表。由井代表の発表は、以下の3つの視点から自らの臨床や実践の結果も含め発表を行った。農薬・化学肥料などが、現代の多くの日本人に深刻な食源病を生んでいること、そして、原発・放射能の真実。そして、薬、予防接種は病気を治していないし、予防していない。それどころか、様々な深刻な病気を起こしている事実が伝えられた。後半に発表された自閉症の子どもたちが、予防接種などに含まれている水銀やアルミナ、そして9種の予防接種を希釈振盪した同種療法で、みるみる改善していく様子を映像で見た時には会場から驚きの声が上がった。由井代表の患者である160名の自閉症の子どもたちのうち、99名の調査結果として、91%が明らかな改善を示しているグラフが映し出された。そして発表の終盤では、由井代表の健康相談で治って言った方々の声が「信念の病気」というタイトルで報告された。難病であるサルコイドーシスや、リウマチ、うつ、虐待、自殺未遂、様々な難病と苦しい人生を生きることになり悩んでいる方々を前に、由井代表は、慈愛に満ちた一人間として、苦しみと悩みを共有しながら患者の心と体の病気が劇的に改善していく様子が映像にてみせられた。希釈振盪した物質が全く入っていないレメディイを使うことを、「荒唐無稽」と言う人もいるが、こうして実際治っていった映像を見せられるとだれもホメオパシーは効かないとは言えなくなるはずである。

英国との中継で講演をしたのは、バイオダイナミック農法を行っているマーク・ムディ氏。ニュージーランド、パキスタンでもホメオパシーを農業に取り入れて良い成果が出ている事また、チェルノブイリで汚染された北イタリアの土地では、ホメオパシーを活用することで放射線値が下がった成果も報告された。

また、由井代表の発表の中でも紹介されていた福島県川俣町で微生物による複合発酵の技術を使い農地の放射能低減の実証試験を行っている高嶋康豪博士の外国人記者クラブでの記者会見映像が、自然エネルギー・東日本復興ネットワーク代表で、福島で自然農、複合発酵技術による、放射能汚染された農地回復のプロジェクトに取り組んでいる佐倉直海さんの解説で報告された。今回のシンポジウムを通じて自然農・微生物・発酵技術・ホメオパシーなどを応用することで放射能で汚染された土壌をもう一度健康な農地へと復活させる希望を感じさせる大会でもあった。